

雪をめぐる相聞

—天武天皇と藤原夫人の贈答歌の位置付け—

竹 嶋 麻 衣

一. 配列に関する問題点

後代の仮託と見ることが定説化しつつある、仁徳朝の磐姫皇后歌群四首を巻頭に据え、天智朝から藤原朝に至る皇族歌人の歌を多く収載した、萬葉集巻二相聞の部は、伊藤博氏ら〔注1〕によって、歌物語的な配列を有することが指摘されている。その中であって前後との関わりが一切なく、独立した形で収録されているのが、天武天皇と藤原夫人の贈答歌である。

天皇賜_レ藤原夫人_一御歌一首

吾が里に大雪落れり大原の古りにし郷に落らまくは後 (②一〇三)

藤原夫人奉_レ和歌一首

吾が岡のおかみに言ひて落らしめし雪の摧けしそこにちりけむ (同・一〇四)

『日本書紀』天武二年の項に「夫人藤原大臣女氷上娘生但馬皇女。次夫人氷上娘弟五百重娘生新田部皇子」(傍線筆者)とあり、天武天皇の妻の中では、藤原鎌足を父に持つ氷上娘と五百重娘とが「藤原夫人」と呼ばれる存在である。この

うち五百重娘は、卷八・一四六五番歌の題下注に「字を大原大刀自といふ。即ち新田部皇子の母なり」とあることから、大原の地に住んでいたと推察され、天皇に「大原の古りにし郷」と歌われる相手としては、この五百重娘が適当であることが分かる。大原は藤原氏の住まう土地であった。天武天皇の宮である清御原宮の位置は未詳だが、「文献史料の上では岡本宮の南で、真神原にあり、雷丘の付近で、東に丘のある所となっている。そうした条件に適する土地の一つとして、飛鳥寺の南、島の庄北方の地があり、企画性をもつ遺構が重層的に遺存し、浄御原宮とも板蓋宮とも推定され注目されて」おり、一〇三番歌では「大原と清御原とは空間的にかなり隔たっているように思われるが、実際は直線距離にして一キロほどに過ぎない。」(稲岡耕二『萬葉集全注』二、有斐閣、一九八五)という。

二首を評して、阿蘇瑞枝(一九九二)は、歌垣における男女の掛け合いの伝統を継承した「ほどよい挑戦と反撃」があり、「しかもそれが強い信頼と親愛の情で裏うちされている」と述べている。

二首の解釈上の問題としては、詠作の場について、「雪の摧けし」の「し」は過去の助動詞か、強意の助詞か、また、歌の背後にあると見られる漢籍の影響をどこまで認めうるか、などの問題がまだ解決には至っていないが、二首のおおよその内容は諸氏一致している。しかし、その一方で、二首がここに収録された意味に言及するものは少なかったように思う。当該二首は「明日香清御原宮御宇天皇代」に収録された唯一の歌である。

卷二相聞の部の中核を為すのは藤原朝の歌群であるが、そこに歌を残す皇族歌人は何れも天武の皇子・皇女であって、天智の皇統は姿を見せない。この背景には、編者―ひいては編纂を望んだ持統女帝の、天武皇統尊重の意識があると考えられる。

伊藤博(一九九〇)は、いわゆる「持統万葉」「元明万葉」の重要な読者として、自身の後継者である皇子、皇女たちを想定しているが、彼らは天武の皇統を継ぐ者であり、卷二に歌を残す皇子女たちと血脈を同じくする者である。彼らに

自身の血脈をより意識させるために、天智皇統の歌は意図的に排除されたのであろう。

このような巻の特性を考慮すると、天武天皇と藤原夫人の贈答歌には、後の歌群にも影響を与えるような、重要な意味があるように思えてくる。また、天武朝の歌として、この二首のみしか収録されていないことにも、何らかの配列意図を感じられる。

天武天皇の時代に他に歌が詠まれなかったとは考えられない。天智系統の歌が排除されたとしても、他に詠み手は大勢いたはずである。資料が散逸したと見ることもできるが、巻二が成立したとされる元明朝から見るとすでに「古」の時代であり、壬申の乱という戦禍を経ている天智天皇代でさえも、皇族関係の歌が五首(②九一―九五)は存在したわけだから、天武天皇代に二首しか残存しなかったとは考えにくい。

また、続く「藤原宮御宇天皇代」の巻頭を飾るのは、大津皇子に関連した歌群(一〇五―一一〇)であるが、そこに収録された六首全てが、天武天皇崩御後の作であるとは考えられず、ここには天皇在世中の歌も一括して収録されている。本来ならば「明日香清御原宮御宇天皇代」の標題下に収録すべき歌を、あえて持統朝に収めた背景には、編者が「大津皇子物語」を意識した、ということも想定されるが、その一方で、天武朝を象徴させるものとして、天武天皇代には意図的に二首しか収録しなかったとも考えられる。

よって以下、本稿では、天武朝の相聞歌として、この二首のみが収録された意味を考えていきたい。

二. 大雪と瑞兆

飛鳥の地に大雪が降ることは、稀なことだったのであろう。天武天皇の贈歌、

吾が里に大雪落れり大原の古りにし郷に落らまくは後(②一〇三)

は、雪に対する喜びと、明るい感動に溢れている。一首に明るく弾んだ印象を与えるのは、オホユキ・オホハラ、フレリ・フリニシ・フラマクといった同音のくりかえしであり、戯歌の様相を呈している。

古りにし里とは、

浅茅原つばらつばらに物おもへばふりにし郷しおもほゆるかも (③三三三・大伴旅人)

わすれ草吾が紐に付く香具山のふりにし里を忘れむが為 (③三三四・大伴旅人)

鶉鳴くふりにし郷ゆおもへども何そも妹にあふよしも無き (④七七五・大伴家持)

おしてる 難波の國は 葦垣の 古りにし郷と 人皆の おもひやすみて： (⑥九二八・笠金村)

三香原 久邇の京師は 山高み：在りよしと 吾はおもへど ふりにし 里にしあれば 國見れど 人も通はず

里見れば 家も荒れたり： (⑥一〇五九・作者不明)

鶉鳴く古りにし郷の秋芽子を思ふ人どち相見つるかも (⑧一五五八・沙弥尼等)

藤原の古りにし郷の秋芽子はさきてちりにき君待ちかねて (⑩二二八九・作者不明)

人も無き古りにし郷にある人をめぐくや君が戀に死なせむ (⑪二五六〇・作者不明)

大原の古りにし郷に妹を置きて吾いねかねつ夢に見えつつ (⑪二五八七・作者不明)

以上の用例から知れるように、旧京や、人氣がなくなつてさびれた里を指す言葉である。二五八七番歌は、当該歌と同じ「大原の古りにし里」だが、この地ばかりが古びた里であるわけではなく、平城京遷都後は、飛鳥や藤原の地も旧京となつた。

元々は活気に溢れた都であり、そこで生活をしていたわけだから、旧京としての「古りにし里」を詠んだ歌からは、強い郷愁が感じられる。また、そこに暮らす女性を想う男性の歌も多い。逆に、二二八九番歌の場合は、「君」を待つ「秋

萩」に、旧京で暮らす女性の姿が重ねられているようである。

当該歌の場合は、旧京を意識しているわけではなく、天皇の、夫人に対する揶揄の気持ちが反映された表現なのである。

天武天皇は下三句で、大原に雪が降るのは自身の住まう真神原より「後」と詠じている。これに関して村田正博（一九八六）は、

その大原の里は清御原宮より見上げる山沿いの地、降雪が早くも深くもあることは常識のうちであろう。したがって、天皇歌の「大原の古りにし里に降らまくは後」とは、負けを承知の挑戦でしかあるまい。

と述べている。天武天皇即位前紀に「天文・遁甲を能くしたまふ。」とあり、天武が天文学に長じていた事情が窺える。それならば気象に関する知識も当然あつたはずだから、村田氏の指摘通り、天皇は相手方に既に雪が降っていることなど百も承知の上で、あえてこのように歌つたと考えられる。彼は降雪の先後を争うことに主眼を置いたわけではなく、純粋に、雪を題材とした掛け合いを楽しむことを目的としていたのだろう。

一首は「私の住む清御原宮に大雪が降つたよ。お前の住む古びた大原の地に降るのは、きっとこれからであろうね。」の意と解される。明るい、純粋な喜びに満ちた歌で、暗さは微塵もない。しかし、雪―特に「大雪」がもたらすものは、喜びだけではないだろう。

たとえば、同じ天武天皇の御製である、

み吉野の 耳我の嶺に 時無くそ 雪はふりける 間無くそ 雨はふりける その雪の 時無きがごと その雨の 間無きが如く 隈も落ちず おもひつつぞ来し その山道を (①二五)

の「雪」からは、辛苦に満ちた強行軍の様子が伝わってくる。また、

風まじり 雨ふるよの 雨まじり 雪ふるよは すべもなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯酒 う
ちすすろひて：(⑤八九二、山上憶良)

では、冬の貧困生活における「極寒」さを、雨交じりの「雪」が強調し、

あしひきの山道も知らず白かしの枝もとををに雪の落れば(⑩三三一五・人麻呂歌集、或本、三方沙弥)
などは豪雪のために道を見失ったさまが詠まれ、

沫雪の庭にふり敷き寒き夜を手枕まかずひとりかもねむ(⑧一六六三・大伴家持)
では、独り寝の寂しさを、降り敷く「雪」が強めている。

後の史書の記録としては、渡辺護(一九九二)も挙げているが、以下のようなものがある。本文は新日本古典文学大系
(岩波書店)に拠った。

三日を以て、將軍東人と共に賊の地に入る。且つ、道を開きて行む。但し、賊の地は雪深く、馬翦得難し。所以に雪
消え草生えて、方に始めて発し遣す。(『続日本紀』天平九年三月)

は、雪のために馬草が手に入れにくく、騎馬の大軍を率いて行くことができないため、雪解けを待つて全軍を送り込んだ、
との記事であり、

また、東人の本計るに、早かに賊の地へ入りて、耕種して穀を貯へ、糧を運ぶ費えを省かむとす。而るに今春、大雪
ふること常年より倍せり。是に由りて早かに耕種に入ること得ず。天の時此の如し。(同・天平九年四月)
では、大雪が原因で軍糧が満足に取れず、困った様子が述べられている。

このように雪は、喜ばしいものとして享受されるよりも、悲哀や辛苦を象徴するもの、困難をもたらすもの、として理
解されることの方が多かった。そんな中で、天武天皇の一〇三番歌が純粹な喜びに満ちているのは、非常に興味深い。

この「大雪」の時期に関しては、伊藤博『萬葉集釋注』一（集英社、一九九五）が、

天武朝（六七二〜八六年）を通して、「雪」に関する記事が「日本書紀」に二つ記されている。一つは、天武六年（六七七）十二月一日で、「雪ふりて告朔せず」とあり、もう一つは、天武十五年三月十日で、「雪ふる」とある。とくに大雪であったために記録されたもので、当面の「雪」をめぐる贈答は、このどちらかの折の詠なのである。・・（中略）・・いづれかといえは、旺盛な天武六年を思うべきかもしれない。

と述べる。これは稲岡耕二『萬葉集全注』二（先掲）が、新田部皇子の出生時期の推定から、天武五年頃に、五百重娘が天皇の寵愛を受けていたと見る説と、時期的にはほぼ重なる。この頃の作と推定して、ほぼ間違いはあるまい。土屋文明『萬葉集私注』一（筑摩書房、一九七六）はより具体的に、大原に居た五百重娘に「諸謔を交へながら雪もふつて面白い浄御原の宮へのぼることを促して居られるのかも知れぬ。」と見ている。興味深い見解だが、そこまで言い切ることは難しいだろう。

この、天武六年の「大雪」が、天武天皇に「喜び」を感じさせる何か、を有していたならば、一〇三番歌の持つ雰囲気も理解できるのだが、そのような何か、は見出しにくい。

紀に記された「雪ふりて告朔せず」の「告朔」は、毎月一日に、天皇が朝堂で諸官司の進上する前月の報告書を見る儀式であるが、これは天候不順の際は中止することになっていた。むしろ雪による被害であって、言祝ぐべき雪ではない。

ではこれは、具体的な事象に裏付けされた「雪」への喜びというより、概念的な「雪」への喜びが歌われたものとするべきであろうか。

当時、飛鳥地方で記録に残るほどの大雪が降ることは稀であったようだが、集中の「雪」の用例自体は百四十例を越える。しかし、その中で「大雪」を詠むものは当該歌以外に二例しかなく、時代を下つても歌中の使用例はほとんど見出せ

ない。村田正博先掲論文によると「大雪」の語が使われる場合は、多く「記録的文章」であるという。

集中の二例は以下のとおりである。

(1) 高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首

かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやに畏き 明日香の 真神の原に ひさかたの 天つ御門を 懼くも
定め賜ひて：取り持てる ゆはずのさわき み雪落る 冬の林に つむじかも い巻き渡ると おもふまで 聞きの
恐く 引き放つ 箭の繁けく 大雪の 乱れて来たれ：(②一九九・柿本人麻呂)

(2) 十一日大雪落積尺有二三寸 因述拙懐歌三首

大宮の内にも外にもめづらしくふれる大雪な踏みそねをし(⑩四二八五・大伴家持)

(1)は天武天皇の長子・高市皇子に対する人麻呂の挽歌であり、壬申の乱における猛々しい姿を表現したものである。雪は、戦乱の物々しさを象徴するものであり、決して喜ばしい存在ではない。

(2)は天平勝宝五(七五三)年の正月十一日に、都に珍しく降った大雪に興を覚えた家持が詠んだ歌であり、「な踏みそね惜し」から知れるように、根底に雪を言祝ぎ、「瑞兆」と見る思想がある。(2)の着想の発端となったものが、同じ巻十九の、

(3)

大殿の このもとほりの 雪な踏みそね しばしばも ふらぬ雪そ 山の上に ふりし雪そ ゆめよるな 人や な
履みそね 雪は(四二二七)

反歌一首

ありつつもめしたまはむそ大殿のこのもとほりの雪なふみそね（四二二八）であり、これには、

右の二首の歌、三形沙弥、贈左大臣藤原北卿の語を承けて作り誦めるなり。これを聞き伝へたる者は、笠朝臣小君にして、また後に伝へ読む者は、越中国掾久米朝臣広繩これなり。

との左注が付されている。歌の伝承者である久米朝臣広繩は、越中国守時代の家持の部下にあたり、この二首が(2)に与えた影響は少なくないと考えられる。

さて、この(2)―発想の元となった(3)も同様であるが―のように、雪、特に正月に降る雪を「瑞兆」と見る思想には、漢籍の影響が見られることが指摘されている。

『文選』所収の謝惠連「雪賦」に、次のような一節がある。「尺に盈つれば則ち瑞を豊年に呈し」―これは、雪が一尺ほど降り積もれば、豊年の兆しとなるという意に解釈される。集中において、この「雪賦」の影響を多分に受けていると見られるのが、

あらたしき年のはじめに豊のとししるすとならし雪のふれるは（⑩三九二五・葛井連諸会）である。この三九二五番歌は、

天平十八年正月、白雪多く零り、地に積むこと数寸なり。ここに左大臣橘卿、大納言藤原豊成朝臣また諸王諸臣たちを率て、太上天皇の御在所に参入り、仕へ奉て雪を掃く。ここに詔を降し、大臣参議并せて諸王は、大殿の上に侍はしめ、諸卿大夫は、南の細殿に侍はしめて、則ち酒を賜ひ肆宴したまふ。勅して曰く、「汝ら諸王卿たち、聊かにこの雪を賦して、各その歌を奏せよ」とのりたまふ。

という前文を持つ歌群（三九二二～三九二六）中の一首であり、同じ宴に家持も参集し、「大宮のうちにもとにもひかる

までふれる白雪見れどあかぬかも」(三九二二六)の歌を詠んでいる。

もつとも、この肆宴歌群は天平十八(七四六)年の時点で筆録されたものではなく、越中在任中の天平二十一年(七四九)年(四月)に天平感宝元年と改元)頃に、家持が資料を入手し、筆録したものと推定されている。山崎健司(一九九六)は、家持越中赴任後の正月の賀宴の記録が、天平勝宝二(七五〇)年から日録的歌卷の中に現れ、正月の雪については積雪量の注記も施されるようになるという事実を踏まえて、

この事実は、雪国越中での生活体験を経て、天平二十一年頃、数年前の正月に都で雪が降った折の肆宴の思い出を筆録した家持が、それ以後、正月を迎えるごとに雪の中での賀宴に関心を寄せていたことを示しているようにと述べている。

「雪賦」は、

歳将暮、時既昏。寒風積、愁雲繁。梁王不悦、游於兔園。酒置旨酒、命賓友。……(中略)……俄而微霰零、密雪下。王迺歌_三北風於衛詩、詠_三南山於周雅。授簡於司馬大夫、曰・・(中略)・・伴色揣稱、為寡人賦_レ之。_(注)
から始まり、雪の酒宴の席で、梁王・劉武の仰せに従って、司馬相如が賦を詠ずるという流れとなっている。この点も肆宴歌群(三九二二～三九二六)に通じる。

大伴家持とその周辺に、「雪賦」の瑞兆思想が浸透していたことは疑いなく、「大雪」を詠じた先掲の四二八五番歌の背景にも、同様の思想を認めて問題ないだろう。

ではこの思想は、時代を遙かに遡る天武天皇と五百重娘の贈答歌にも認められるのか、というと、その可能性は低いようだ。

土屋文明(筑摩書房、一九七七)は、先掲の三九二五番歌について、

雪を豊年の前兆とすることは、大陸の思想であるが、諸会もそれを書物の上で知つて居つて用ゐたのであらう。日本でさうしたことを言ふのは、ここらが始めであらう。

と述べる。事実、集中の「雪」の用例の中で「雪賦」を明確に意識したと思われる歌は、この天平十八年の肆宴歌以前には存在しない。家持の時代に一般化した概念と見るのが適當である。もし、天武天皇の時代にこの概念が浸透していたならば、そこから家持の時代まで、雪を瑞兆と見る歌が一首も詠まれていないのはおかしい。渡辺護（一九九二）は、一〇三番歌の解釈の根底に、「雪を良きものうらやむべきものとみる考え方が存在しているように思われる」とする一方で、雪を美しいと捉える見方は、現代人の感覚を短絡的に古代の一首に重ね合わせたものにすぎず、当時はまだ「雪＝瑞兆」という見方は存在していなかったとして、「当面の歌について、『瑞兆』という言葉は簡単に用いられるべきではない」と述べている。そして、後述するが、「天武天皇と雪」という枠組みで改めて一首を捉え直している。

それとは逆に、天武天皇の御製歌に漢籍の影響が強く認められることから、当該歌、及び藤原夫人の返歌にも「雪賦」の影響を積極的に認めているのが、坂本信幸（一九九九）である。

坂本氏は、「巻一・二五番の天武天皇御製歌の成立過程について」（一九九三）の中で、吉井巖（一九七八）の「われわれは、『壬申の乱』前後の天武天皇の行動を中心とした歌あるいは歌を中心とした物語が、天武天皇の顕彰を主旨として存在していた高い可能性を推定しうる。この歌物語には誦詠の主旨を心得ていた専門詞人が介在していたはずである。」を踏まえて、

単なる相聞歌謡の歌い変えの歌でなく、壬申の乱の実体験の回想の歌として・・（中略）・・その典拠に武帝の「苦寒行」の典拠となった詩経の詩句を踏まえた歌作りは、初期の万葉にあつてかなり高度なものといえる。前述のように専門詞人の介在を推定する所以である。（傍線部筆者）

と述べる。それと同様に先掲論文でも、

このような漢籍を踏まえた見事な贈答が、果たして実際に天武と夫人とによって作られたものなのかどうかについては、疑問とせざるを得ない。・（中略）・二十五番、二十七番の天武歌自体が、初期万葉にあつては専門歌人の介在を推定せざるを得ない高度な作であつた。男女の和合も豊年の徴。「詩経」を踏まえて豊年の瑞祥たる大雪をめぐつての贈答を見事に交わしたこの歌も、天武の御代を壽ぎ、豊かな稔りを願う心から、専門詞人が作つた贈答のよ
うに私には思われる。

としている。しかし、天武天皇の独詠歌であり、類歌も多く、伝誦の可能性が非常に高い二十五番歌や、吉野の盟約が行われた天武八年の行幸時の作歌と見られる、

よき人の良しとよく見てよしと言ひし芳野よく見よ良き人よくみ（①二七）

と、藤原夫人との贈答歌を同一の枠組みで論じることが不可能であろう。

仮に、当該歌がわずかでも「雪賦」を意識して詠まれたものであつたとしても、それは天武天皇の行為と見て問題はな
いのではないか。漢籍の素養の有無で、実作か仮託かを論じることには限界があるだろう。

雪を言祝ぐ思いが、一〇三番歌に込められていることは間違いない。だが、用例が家持の時代を下らないこと、二十五
番歌と当該歌を同一視できないことから、この思いは、漢籍によるものではなさそうだ。また、歴史的な事実として、こ
の日の雪が何か良い状況を引き起こした、というわけでもない。では、天武天皇の雪を喜ぶ心は、どこから生まれてきた
のだろうか。

それを考える時、注目されるのが、先掲の渡辺護（一九九二）である。渡辺氏は、

み吉野の 耳我の嶺に 時無くそ 雪はふりける 間無くそ 雨はふりける その雪の時無きがごと その雨の

間無きが如く 隈も落ちず おもひつつぞ来し その山道を(①二五)

と或本歌(①二二六)の関連に着目し、元々民謡であった歌が天武の事蹟に仮託された背景には、天武の吉野入りがあり、享受者は「吉野の雪」を、壬申の乱における天武を象徴するものとして捉えていた、と述べる。そして、

日本書紀に記されたような吉野入りから一年後の壬申の乱を経て、いま、万葉集の天武は心満ち足りて飛鳥の雪を見ていることになる。「我が里に大雪降り」の諸譚が天武に生まれた原因は、唯一そこにしか求められない。吉野の雪と、飛鳥の雪。享受者の側に立てば、その両者が互いに映じ合って、この天武像を飾っているのである。

天智十(六七二)年十月、大海人皇子は近江朝の重鎮に見送られて、吉野に入った。

壬午に、東宮、天皇に見え、吉野に之りて修行仏道せむと請ひたまふ。天皇、許したまふ。東宮即ち吉野に入りたまふ。大臣等、侍送り、菟道に至りて還る。(天智紀・新日本古典文学大系、小学館)

表向きは仏道修行のため、しかし実際は天智の目を避け、隠遁し、反乱の機会を窺うためであった。十二月に天智天皇は崩御し、翌年、皇子は壬申の乱を起こす。

この吉野への道行きが相当過酷なものであったことは想像に難くない。天武天皇にとって、壬申の乱における「吉野の雪」は、辛く厳しい戦乱の記憶である。そして戦乱を経て、心穏やかな状態となった今だからこそ、雪は美しく、喜ばしいものとして彼の目に映るのだ。渡辺氏は、享受者の観点で「吉野の雪」と「飛鳥の雪」を対比し、天武を象徴するものとしているが、天武本人の実感としても、吉野の雪を思い出すことで、今の雪が美しく見えるということは十分有り得るだろう。

雪を瑞兆と見る思想を、当該歌に認め得ない以上は、このように理解することが最善ではないだろうか。天武の満ち足

りた心が、雪をよいものに見せ、それゆえ、一首は純粹な明るさに満ちているのだろう。

三、霏（おかみ）と藤原氏

では、対する藤原夫人の奉和歌はどのように解されるか。

吾が岡のおかみに言ひて落らしめし雪の摧けしそこにちりけむ（一〇四）

第四句「雪の摧けし」は、「摧け」を動詞と見るか、名詞と見るかで、「し」の解釈が分かれている。つまり、動詞であれば過去の助動詞、名詞であれば強意の助詞と捉えるわけである。「萬葉代匠記」精撰本に「摧は物の摧けたるかたはしの意なり」として、「摧け」を名詞として以来、その見方がなごらく踏襲され、「し」を強意と捉える見方も、『萬葉集古義』以来多く行われてきた。しかし、澤瀉久孝（一九五四）は、「くだけし」といふ風な用言を主語とした例が集中にある事「雪のくだけ」といふやうな名詞は古今に例を見ない事」「くだけ」の名詞を見出した時には我々の語感と一致するものとして用ゐられてゐる事」の三点から名詞説を否定し、「雪のくだけたのが」と動詞プラス過去の助動詞で解している。これは根拠を明示した点で、他注釈書よりも優れていたのだが、その後も反論が示されており、どちらとも断定しがたい。積極的な根拠とはなりえないが、「摧く」という動詞の例が集中に複数見られる一方で、名詞で解釈出来るものがこの一例しかないことから、本稿では澤瀉説に従つておく。

一首は直訳すると、「私の居る（大原の）岡にいます霏に命じて降らせた雪の砕けたのが、そちらに降つたのでしよう。」となる。「古りにし里」と歌われた大原の地を、夫人は「岡」と言い直しているが、それは天皇の擲楡に対して、自身の住まう場所の方が高所であることを示し、「相手の『我が里』を見下ろす位置にあることをにおわし」たもの（伊藤博『萬葉集釋柱』一、先掲）と解される。

靄（おかみ）は水を司る龍神。『日本書紀』卷一・神代上、第五段、一書第六（新日本古典文学全集、小学館）には、
 ・復剣の鋒より垂る血、激越りて神に為る。号けて磐裂神と曰す。・（中略）・復剣の頭より垂る血、激走りて神に為る。号けて閻靄と曰す。

とあり、また、「靄、此には於箇美と云ふ。音は力丁反。」（同、第五段、一書第七）から訓みが「おかみ」であることが分かる。

作者の五百重娘は天智朝の重鎮・藤原鎌足の娘であり、天武天皇の薨去後には異母兄・不比等に嫁して一男（麻呂）を成している。同母姉の氷上娘は天武十一（六八二）年に、幼少の但馬皇女を残して薨去しているが、彼女は藤原氏の拠点である大原に暮らし、大原大刀自と呼ばれ、藤原家の内部では相應の地位を得ていたものと推察される。

この「藤原」という氏族は、神祇官の氏である「中臣」の改姓であり、祭祀の家柄である。そこで、折口信夫（一九六五）は、

藤原氏の女の、水の神に縁のあつた事を見せてゐるのである。「雨雪の事は、こちらが専門なのです」かう言つた水の神女としての誇りが、おもしろく昔の人には感じられたのであらう。

の一首を解釈している。^(注)当該歌の背景に「水を司る」藤原の女としての矜持がある、というこの見解は、支持されるべきものと思う。このことを念頭におけば、一首は、大雪を誇り、大原の地を古びた里とからかつた天皇に対して、それは藤原の女である私が、奉仕している龍神様にお願ひして降らせてもらつた雪がくだけたものにすぎないのですよ、何を得意がつていらつしゃるのですか、と見事に揶揄を返した歌と見ることが出来る。

そして、それこそが天武天皇が期待した答えであつたように思う。彼は、夫人が祭祀の家の娘であることを重々承知の上で、あえてからかいの歌を投げ掛けたのではないか。あたり一面を覆う真つ白な雪を見て、天皇は雪を話題にした掛け

合いを思い付いた。相手は龍神を司る五百重娘。彼女はどんな反応を見せるか、自分の意図を汲み取った返歌をしてるか―天皇は、期待と興味を抱いて、夫人に歌を送ったのであろう。

天皇の期待に見事に答えた五百重娘は、集中にもう一首、巻八・夏雑歌の冒頭を飾る、

霍公鳥いたくな鳴きそ汝がこゑを五月の玉にあへ貫くまでに(⑧一四六五)

を残しているが、これに関して、稲岡耕二『萬葉集全注』二(先掲)は、この歌の持つ無邪気な明るさは、天皇との贈答であっても、物怖じせず、対等の気持ちで詠んだ一〇四番歌に通じるものがあると述べている。

さて、夫人の返歌の解釈において、最も問題視されているのは、「雪の掛け」という語についてである。これは澤瀉久孝『萬葉集注釋』二(中央公論社、一九五八)曰く、「古今に例を見出し得」ず、漢籍からの影響が想定されている。たとえば、先掲、坂本信幸(一九九九)は、以下のように述べる。

「雪賦」には「盈尺、則呈瑞於豊年」の詩句の後、司馬相如の「雪之時義、遠矣。請言其始」と述べて、冬が極まって初めて雪の降る情景を述べる行が続いて行くが、そこに、「霰淅瀝而先集、雪粉揉而遂多」と叙述されており・・(中略)・・これらは知識として万葉人の知るべきところであった。つまりこれが意味するところは、大雪の降る始めには、まず降った雪が湿気により霰となり、その霰が掛け散ってやがて後に寒さによって大雪となるというのである。

坂本氏は表現の背後に、「文選」や『詩経』の影響を見、その特異性を夫人の才能によるものとは見ていない。

また、平館英子(一九九三)は、

本文の「摧」は「長歌正激烈、中心愴以摧」(漢・蘇武「詩四首・其二」)『文選』卷二九)のように悲痛を表すのに用いられ、また「くだく」の語は集中いずれも「心碎けて」の意である。そして「塵」を「散」の借訓に使うことは、

雪との関連において「玉塵」の語（梁・何遜「和司馬博士詠雪詩」など）を思わせる。そういう詩の表現を踏まえて、降る雪を我が心が碎けてちる塵と表現し、共に雪見のできない嘆きを託したと解したいと述べる。

平館氏の指摘の通り、集中の「摧く」の用例は、悲痛の念―特に恋情に関わるものである。以下に例を挙げる。

むら肝のこころ摧けてかくばかり吾が戀ふらくを知らずかあるらむ（④七二〇・大伴家持）

…肝向かふ 心摧けて 玉だすき かけぬ時無く 口やます 吾戀ふる兒を…（⑨一七九二・田辺福麻呂歌集）

雨ふればたぎつ山川いはにふれ君が摧かむこころは持たじ（⑩三三〇八・作者不明）

更に、表記が異なる場合でも同様のことが指摘できる。

高山ゆ出で来る水のいはにふれ破けてそおもふ妹にあはぬよは（⑪二七一六・作者不明）

…戀ひしくに 痛き吾が身そ いちしろく 身に染みとほり むら肝の 心碎けて 死なむ命 にはかになりぬ…

（⑬三八一一・娘子）

表現自体も非常に類似しており、共通の認識の上で「摧く」の語が使用されたものと推察される。

ただ、五百重娘の一首にも同様の発想が認められるか、という点、それは困難であろう。まず第一に「吾岡之於可美尔言而令落雪之摧之彼所尔塵家武」という表記が、作者自身の手によるものとは断言できない。また、表記の問題ではなく、「クダク」という音自体が「恋にまつわる悲痛の念」を表すもののだとしても、五百重娘にはそのような悲痛さが感じられない。「共に雪見のできない嘆き」は、「心」を「摧くほどの悲しみではないだろう。五百重娘の歌は、他の「クダク」の歌とは表現の類似も少なく、内容もかけ離れている。やはり、当該歌の場合は、純粹に「雪が碎ける」の意で取るべきなのではないか。

「雪の掛け」という語は確かに特殊である。しかし、和歌に類例がなく、漢籍に例があるからといって、すぐさまそれを結びつけるのは早計だろう。「摧」にこだわって、背後にある漢籍の特定に終始することは、歌の本質を見落とす結果をもたらすのではないだろうか。

ただし、別次元の問題ではあるが、当該歌の記録者や、巻二の編者、その後の享受者たちが、この歌の背後に漢籍の影響を見た可能性はあると思われる。

なお、夫人と同じ藤原氏の代表格である光明皇后に、

藤皇后奉_二天皇御歌一首

吾が背兒とふたり見ませばいくばくか此のふる雪のうれしからまし(⑧一六五八)

という聖武天皇に贈った一首がある。これに関して、渡辺護(一九九二・先掲)は「彼女のおばである藤原夫人への血脈上の意識」を認めている。また、聖武天皇が、草壁—文武の流れを継ぐ、天武系正統の男帝であることにも関連があると、「聖武と光明子の関係はさかのほれば天武と藤原夫人のあり方そのままであろう。」と見ている。

たとえば、穂積皇子が酒の席で盛んに誦詠していたという、

家に有る櫃にかぎ刺しをさめてし戀の奴のつかみかかりて(⑩三八一六)

に対して、孫にあたる広河女王が、

戀は今ほあらじと吾はおもへるをいづくの戀ぞつかみかかれる(④六九五)

と詠んだように、同じ血脈の、先人の歌を連想させる歌を詠み、歌をもつて自身の血脈を辿る営みは、当時それほど珍しい行為ではなかったようである。光明皇后が心に描いた、背子と二人で見る雪の情景が、天武と五百重娘をイメージしてのものであった可能性は高いだろう。それならば、天武天皇と五百重娘の贈答歌は、光明皇后の時代には広く享受され、

語り継がれていたということになる。人々に愛され、誦詠された歌であったのだろうか。天武天皇の一〇三番歌からは、妹と二人で見る雪を喜ぶといった情景は見出せないが、光明皇后は——もしくは歌を享受した奈良朝の人々は、天皇の擲掄の裏に、美しい雪を共に見られない嘆きを読み取っていたのかもしれない。

四 天武朝の象徴としての「雪」

飛鳥の地に降った、稀有な大雪をめぐっての天武天皇と藤原夫人の相聞は、これまで述べてきたように、いくつかの問題を孕んでいた。

そして、これまではほとんど言及されなかった問題が、二首が卷二相聞の部に収録された意味についてである。本稿はその謎を解き明かしたい。

二首に続く藤原宮の歌群の冒頭、

大津皇子竊下_二於伊勢神宮_一上来時大伯皇女御作歌二首

吾がせこを倭へ遣るとさ夜ふけて鶏鳴露に吾が立ちぬれし(②一〇五)

二人行けどゆき過ぎ過ぎ難き秋山を如何にか君がひとり越ゆらむ(同・一〇六)

から始まる大津皇子関連歌群は、彼が謀反の罪で天武崩御後、僅か一月足らずで賜死となっていることから、実際は「明日香清御原宮御宇天皇代」の標題下に収録すべきものであった。しかしそれらは藤原朝に一括して収録されているわけである。この背後に、卷二編者の配列意図——歌群から、大津皇子の謀反事件を連想させること——があるのは間違いないだろう。そして、大津皇子の事件が「表」であるならば、「裏」にあるのは天武天皇の死である。

天武在世中の、満ち足りた心で詠んだ雪の歌と、天武の死を想起させる大津の歌とを、同じ標題下に収めることは、や

はり避ける必要があつたのではないか。藤原朝は、天武朝の終焉によつて始まる。それを最も象徴するのが、大津皇子の歌群であつた。編者は意図的に、藤原朝を大津から始めたのではないだろうか。

そう考える時、雪の贈答歌と大津の歌群とが、切り離されている理由は明らかである。だがそれは、二首のみが天武朝に収録された理由とはならない。

ではなぜこの二首であつたのか—それは、二首が「雪」をめぐる相聞であつたからだと私は考える。

天皇歌の雪に関連して引用した、渡辺護氏の論を再度示したい。氏は、雪を「天武天皇を象徴するもの」と捉えている。そして、その雪を巧みに利用したのが柿本人麻呂であり、新田部皇子献歌(③二六一・二六二)や安騎野遊獵歌(①四五)、先掲の高市皇子挽歌(②一九九)に、「決意して吉野に入り、後の壬申の乱を貫徹した天武の英姿を、雪に象徴させる」という人麻呂の意図が見られると述べる。このような歌を通して人麻呂が目指したのは「歌を献ずるべき皇子の貴重な血脈を、雪をもつてさかのぼる」ことであつた。

天武天皇が雪を詠じる時、それは一方では壬申の乱の「苦難の雪」を、一方では乱後の「喜びの雪」を意味する。時代を経て、歌を享受した者たちは、吉野の雪と飛鳥の雪を重ねて、「雪」というものに天武天皇の生き様が集約されていると感じたのであろう。

雪を天武天皇の象徴と見た渡辺論の核となるのは、柿本人麻呂が志向した、天武天皇の皇子の「貴重な血脈を、雪をもつてさかのぼる」行為に関する箇所である。氏は、当該二首を、巻二相聞の部全体の中では捉えていない。二首がその後人麻呂によつて、どのように享受され、利用されたか、という点に主眼が置かれている。しかし、この「雪」天武の象徴」という観点から、巻二相聞の部における二首の位置付けを行うことが可能である。

巻二相聞の部の編者が、どのような経緯でこの贈答歌を手にしたのか、それは分からない。すでに記録されたものを資

料として受け取ったとも、口誦で語り継がれていたものを自分で書き留めたとも考えられる。いずれにしろ、歌を見聞きした時、編者は、人麻呂と同じように「雪」を通して、天武の吉野入りから壬申の乱の勝利、その後の治世までを、心に思い浮かべたのではないだろうか。編者も、早い段階に歌を享受した一人である。ただ、享受した歌の利用法が、編者と人麻呂では異なっていた。

卷二相聞の部には天武皇統を尊重する意識がある。天武天皇と五百重娘の雪の贈答歌を、その御代を言祝ぎ、以下に続く天武の血脈を言祝ぐために、編者が意図的に「明日香清御原宮御宇天皇代」に収録したと見ることは、十分可能であろう。卷一の巻頭を飾る雄略天皇御製歌、卷二の巻頭を飾る磐姫皇后歌群、それらが持つ巻頭性、規範性の^{（注）}ようなものが、当該二首にも認められるのではないか。卷二相聞の部において、天武天皇の生きた時代は、一組の贈答歌によってのみ、象徴されているのである。

このように、雪の歌によって一つの時代を象徴させ、完結させた例としては、他でもない、卷二十の巻末、すなわち『萬葉集』の最終歌である、

三年春正月一日於因幡國廳賜饗國郡司等之宴歌一首

新しき年のはじめのはつはるのけふふるゆきのいやしけよごと（②四五一六）

右一首守大伴宿祢家持作之

が挙げられる。この歌には、先述した「新年の雪を豊年の瑞兆と見る」漢籍の思想が見られる。また、大濱眞幸（一九九一）によると、この日は十九年に一度巡り来る「歳旦立春」に当たり、格別にめでたい日であるという。山崎健司（二〇〇五）はこれを支持しつつ、「そのことに加えて因幡の地から都の新しい天皇（淳仁・筆者注）の時代への予祝を行ったというのが、もうひとつの重要なこの歌に込められた詠作時における意味ではなかったかと思う。」と述べる。更に、編

纂の時点から巻末歌を見直すとき、「巻頭に若き日の先太上天皇元正と淳仁の父・舍人親王との間で交わされた君臣唱和の歌が掲げられていて、巻末歌において間接的に意識されている淳仁天皇との対応が認められること」が注意されるといふ。そして、氏は、

淳仁は仲麻呂と運命を共にした悲劇の天皇であったが、仲麻呂についても巻第二十では淳仁即位前の様子までしか伝えていない。孝謙と淳仁・仲麻呂との対立はその後表面化し両者に決定的な亀裂が生じることになるけれども、巻末に三十一首を増補しながら、その時代については語らない。巻第二十のあり方は、元正の在位中や孝謙に譲位した後をも含めた、より広い意味における聖武朝の終焉ということが強く意識されていたことを示している。

と述べ、巻末歌が「聖武朝の皇親体制が終焉を迎え」たことを伝えていると見ている。御代を象徴し、言祝ぐ歌が、ここでは歌集に終止符を打つ役目を果たしているのである。天武天皇と五百重娘の贈答歌も、僅か二首ではあるけれども、歌の持つ意味、果たした役割は相当のものであったと考えられよう。

*

以上、本稿では雪をめぐる天武天皇と藤原夫人の相聞が、巻二相聞の部の中でどのように位置付けられるものなのかを考察してきた。渡辺氏の論に拠るところが多かったが、氏とは異なり、巻二相聞の部という「まとまり」の中で歌を捉えることで、従来その位置付けが曖昧であった二首に、配列の必然性や、重要な存在意義を見出すことができたのは、大きな収穫であったと思う。

萬葉集の用例を引用するにあたり、『補訂版萬葉集本文篇』（塙書房）を底本とし、正訓字の場合は漢字で、それ以外は平仮名で表記する形をとった。注記の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館）を参照している。

(1) 伊藤博「卷二磐姫皇后歌の場合」(『万葉集の構造と成立』上、塙書房、一九七四)は、卷二相聞の部が「歌物語的趣向のもとに集められ、後人にあるロマンスを感じさせるように配列されている」ことを指摘する。また、中西進「感愛の誕生―万葉集巻二の形成―」(『国語国文』第三十五―四、一九六六初出、万葉論集第六巻『万葉集形成の研究 万葉の世界』講談社、一九九五)でも、巻二の配列に編者の意図が反映されていることが論じられているが、中西氏は相聞と挽歌を一連のものとして捉え、挽歌を含めてはじめて物語が完成すると見ている点で、伊藤氏とは異なっている。両氏とも個々の歌の解釈については、ほとんど言及せず、全体像の把握にとどまっているため、巻二収録の歌全てが物語的であるかのような印象を受けるが、そうでない歌も少なからずある。大津皇子の歌群など、特に物語性が顕著な歌群に関しては、伊藤・中西氏以外の先行論文の数も多い。

(2) 返り点は、新釈漢文大系『文選』賦篇下(明治書院)を参照して付した。

(3) この見解を支持するのが、伊藤高雄「飛鳥の靈神―天武天皇と藤原夫人の唱和歌―」(櫻井満先生追悼記念『古典と民俗学論集』おうふう、一九九七)であるが、伊藤氏は一〇四番歌の「我が岡」を、夫人の住む大原から見て更に丘陵部であり、南に七五〇メートルほど離れた、水霊祭祀の伝承の地、岡寺山ではなかったかと推測されている。

(4) 新田部皇子献歌は以下の二首で構成されている。

やすみしし 吾が大王 高てらす 日の皇子 しきいます 大殿のうへに ひさかたの 天伝ひ来る 雪じもの ゆきかよひ
つつ いや常世まで(③二六一)

反歌一首

矢釣山木立も見えず落りまがふ雪に騒げる朝樂しも（同・二六二）

傍線部は渡辺氏の訓み。氏は「人麻呂の長歌が『雪』をうたつてこの場にふさわしかったのは、単に眼前の雪を即座に取り上げたばかりでなく、一世代前、新田部皇子の父天武と母藤原夫人の雪の贈答歌を強く想起せしめたからに他ならない。」「人麻呂のうたう矢釣山を覆う豊かな雪は、明らかに、天武が『我が里に大雪降り』とうたった歌に対応しているのではないか。」と述べる。

(5) 伊藤博『萬葉集の構造と成立』上、塙書房、一九七四参照。

参考文献

- ・阿蘇瑞枝（一九九二）「相聞歌の様式―贈答歌を中心に―」（『万葉和歌史論考』笠間書院）
- ・伊藤 博（一九九〇）「原万葉の形成」（『増訂版日本文学全史1上代』学燈社）
- ・大濱眞幸（一九九二）「大伴家持作『三年春正月一日』の歌」（吉井巖先生古稀記念論文集『日本古典の眺望』桜楓社）
- ・澤瀉久孝（一九五四）「雪のくだけしそこに散りけむ」（『萬葉』十号、『萬葉集注釋』二も同様。）
- ・折口信夫（一九六五）「水の女」（『折口信夫全集』第二卷、中央公論社）
- ・坂本信幸（一九九三）「卷一・二五番の天武天皇御製歌の成立過程について」（『萬葉』百四十五号）
- ・坂本信幸（一九九九）「天武天皇と藤原夫人の雪の贈答歌」（井手至先生古稀記念論文集『国語国文学漢』和泉書院）
- ・平館英子（一九九三）「万葉集名歌事典」（『万葉集事典』学燈社）
- ・村田正博（一九八六）「我が里に大雪降り」（『いづみ通信』八）

- ・ 山崎健司 (一九九六) 「大伴家持の歌群意識―卷十九の題詞なき歌をめぐって―」(伊藤博博士古稀記念論文集『萬葉学漢』 塙書房)
 - ・ 山崎健司 (二〇〇五) 「萬葉集卷第二十の編纂をめぐって」(『萬葉集研究』第二十七集、塙書房)
 - ・ 吉井 巖 (一九七八) 「卷十三長歌と反歌」(『萬葉集を学ぶ』第六集、有斐閣)
 - ・ 渡辺 護 (一九九二) 「雪歌の一系譜―天武の雪と人麻呂の雪―」
- (『美夫君志』四十五号、後、『萬葉集の題材と表現』大学教育出版、二〇〇五)